主役の声―

学校の主役は、もちろん児童・生徒。平良小学校では昨年1月に平良っ子応援団が開設し、体育や書写、図工や家庭科などの支援を行っています。平良小学校で学ぶ児童の一人、佐々木瑠偉くんに学校支援が入ってからの学校生活を聞きました。

平良小学校体育、マット運動の様子。ボランティアの方が一人一人を見守ることで技術面の向上だけでなく、児童の安全面でも効果的です。

できなかったことができたとき、褒めてもらえました

平良小学校4年 佐々木 瑠偉くん

一番の楽しみは、授業の中でいろいろな人と会えることです。

以前から地域の人は学校で陸上競技の教室を開いてくださったり、登下校を見守ってくださったりと身近な存在でした。だから、地域の人が学校の中にいることが不思議なことだとは思いません。

その中で、記憶に残っている出来事があります。平良小では体育の授業に支援に入ってもらっています。その授業の中で、僕は今までできなかった鉄棒の逆上がりができるようになりました。ボランティアの方は「ここをもう少し頑張ればできるよ」とアドバイスをしてくださりました。逆上がりができたときも、褒めてもらえたことがとてもうれしくて達成感もありました。

学校の行き帰りも見守ってくださる人たちがいます。いつもあいさつをしてもらえるのがうれしくて、毎日楽しく通学しています。

―次世代が教育を学ぶ場へ―

活動に参加する広島修道大学3年生の栢木啓伍さんに話を聞きました

この活動には、大学の地域課題を検討するプロジェクトを通じて関わっています。

学校支援活動は、さまざまな年代の人が関わるので、子どもたちだけでなく私たち大学生も多面的な考え方や見方を体験できます。

将来教師を目指している自分にとって、地域の人の学校に対する考え方を知ったり、また児童との接し方を間近で見たり聞いたりする体験は非常に参考になり、大学では学べない多くのことを学んでいます。

地域の方との活動を通して、学校支援は子どもを見守ることであり、子どもを深く理解することだと実感しています。

大野西小学校で行われた朝の読み聞かせに参加する栢木さん。「地域の人も快く迎えてくださるので、活動に参加しやすいです」と話してくれました。

私たちが支えます。地域連携推進員―。

地域連携推進員
田中　誠治（たなか・せいじ）写真左
正留　律雄（まさる・りつお）写真中
今井　弘子（いまい・ひろこ）写真右

学校のボランティアの方々は、学校支援活動の中で、子どもたちの安全を見守ったり、授業の補助をしたり、学校の行き帰りの見守りをしたりと、様々な活動をされています。

学校支援ボランティアの方々は、学校の教員とボランティアとのつなぎ役として活躍する地域連携推進員。

学校支援はあくまでも善意のボランティア。ボランティアに無理なく楽しんで続けてもらうために、普段の支援活動のお手伝いや、新たに支援を開始する学校や地域へのアドバイザーとしても機能しています。

推進員は学校関係者○Ｂで構成されています。学校に入ることが初めての人や、子どもへの声の掛け方や子どもの見守り方が分からないときなどに支援が円滑に進むようアドバイスやサポートを行っています。

学校から地域へ

「地域が子どもを支援する」、この目的のために一つになりはじめた地域。それぞれの様子を聞きました。

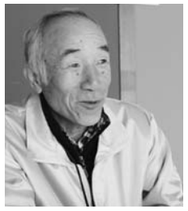
大野きずな応援団会長
山本　國雄さん

将来に向け、種を植える

地域活動には取り組まなければならないことがまだ多くあります。

学校支援活動も発足５年目となり、今まで活動を支えてきた人が高齢を迎える中、地域が学校に入ることで保護者も地域の活動に理解を示してくれています。

今後も子どもから大人まで学校支援を通じて、将来の地域活動を支える種を植えていきます。



平良っ子応援団会長
田中　和雄さん

地域の持つ力を学校に

平良小学区では陸上教室や読み聞かせ、見守り活動など個人や団体で学校の支援に関わっていたので、支援を開始する土壌ができていました。ただし、それぞれができる形での支援活動だったのが、学校支援の組織ができたことで、一つのまとまりとして活動ができるようになりました。今後は、地域の持つ力をより生かしていきたいですね。

あじなっ子応援団・あ東っ子応援隊会長
関口　禮伸さん

未来の主役は子どもたちです

支援を開始して１年。子どもたちが親しみをもって接してくれるようになりました。昨年は市民センターまつりに阿品台東小の児童が参加してくれました。今後は次の地域の主役を担う子どもたちに、活動への参加をどう呼びかけていくかが課題です。学校支援はどうしたら子どもと大人がともにまちづくりに参加できるかを考えるきっかけになりました。

大野東っ子応援団会長
江口　慎三さん

子どもたちの意識を地域に

お祭りや清掃など地域でのイベントはさまざまですが、子どもを持つ親世代の参加をどう促していくかが課題だと考えています。学校支援を通じて子どもたちの意識が自然と地域に向くようにもなってきたと思います。あいさつを交わしたり、関わる機会が増えるほど、子どもだけでなく、親世代も地域に意識を向けてくれるのではないでしょうか。

ぽんぽこ応援団会長
重村　泰夫さん

３地区を越えた交流に繋がります

佐方小学校は、佐方、平良、廿日市の地区にまたがった学区です。地域の活動では地区の垣根を越えることはあまりありませんが、学校支援では３地区が集まって交流を持つことができます。さまざまな人が関わることでまちづくりも活性化していきます。学校支援を通して３地区を越えたつながりを持つことができたのが大きな成果ではないでしょうか。

あじなっ子応援団・あ西っ子応援隊会長
藤井　義則さん

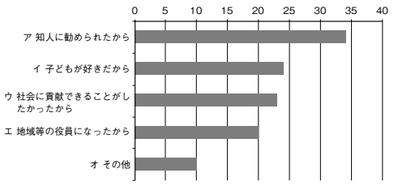
地域と学校のつなぎ役に

これまでも、通学路点検や子どもとの交流、登下校時の見守り活動を老人クラブなどと行ってきました。学校支援が始まったことをきっかけに、今までの活動を地域ぐるみで行いたいという意識がでてきました。活動に参加している皆さんにとって子どもとの触れ合いは新たな刺激を受けるいい機会。地域と学校をつなげるきっかけに一役かっています。

学校をやりがいと、触れ合いの場へ

学校支援ボランティア回答

問．学校支援ボランティア活動を始めようと思われた動機は何ですか。（複数回答可）



問．学校支援ボランティア活動をされる中で感じられたことを教えてください。

- 子どもさんと顔見知りになって、地域でもよくあいさつしてくれます。自分の生活にもはりができたように感じます。
- 子どもたちが興味を持って、真剣に聞いてくれてうれしいです。話し掛けてくれたりもします。孫のようで、成長を楽しみにしています。
- 担任の先生や子どもたちが温かく迎えてくれ、親しく接してくれるので楽しいし、スムーズに入っていけます。地域の人が教室に入ることが、普通のこととして受け入れられることがすごいと思います。

大野西小学校のボランティアルームの様子。各学校にこのような教室が設けられ、活動を後押ししています。

学校内には支援活動の拠点となる教室があります。学校支援に入る人の待合室として機能するほか、活動の協議や情報交換をはじめ、ボランティア同士の交流の場としても使われています。活動を通じて知り合う人も多く、地域の中で和が広がる場所にもなっています。子どもたちの笑顔を見ることができるのも大きなやりがいの一つですが、学校支援を通じて同じ地域の人同士がゆっくりと話せる意義も大きいと聞きます。